Title	巻頭のことば
Author(s)	小倉，義明
Citation	キリスト教と諸学 ： 論集, Volume23, 2008.3 : 1-2
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=3242
Rights	

聖学院学術情報発信システム ： SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

巻頭のことば

韓国の李　明博・次期大統領は一月十七日、ソウルで外国メディアと会見して、日韓関係について次のように述べた。

「新しい韓日関係のためには（韓国への）謝罪や反省をしろという話はしたくない。今の日本はそれを要求しなくても過去についての話ができる成熟した外交をすると思う」。

この発言は、勇気と叡智に満ちている。外交や政治に、倫理は入りこむすきがないというペシミズムがしばしば語られるが、李　明博氏はそのペシミズムを乗り越えようとしている。

人間関係は、個人としても集団としても、相手の過去の過ちに固執して責めるだけでは、その未来は開かれて来ない。小泉元首相は靖国神社参拝を強行し、竹島領有権をめぐる韓国の主張に断固耳をかそうとしなかった。盧武鉉大統領の方でも日本の朝鮮併合と植民地政策、それらについての教科書記述の仕方など「歴史問題」に固執した。おかげで、両国間の外交は冷却し、国民感情は互いに悪化した。

李　明博氏の先の発言は、閉塞した対日政策の転換を促す画期的なものだ。この転換は政策上の術だと言うべきでなく、一つの倫理的決断であったと見るべきであろう。李氏は誠実なキリスト者であると聞くが、なるほど彼のこのたびの決断にはキリスト教的識見が認めうるように思う。第一に、低迷する状況に脚をすくわれることなく、状況を抜け出そうと「上を見上げている」。第二に相手方、日本がどう出てくるかを見た上で動くといった具合でなく、謂わば〈先行的に〉和解と協調を打ち出したことが、それである。

＊

そこで第一の〈上へ抜け出る〉ということだが、これはキリスト教の信仰と倫理にとって基本的な動きである。聖学院は聖なる者に向かう垂直次元を大切にする。超越に向かって自己を開く時、人は相対化される。これがデモクラシーの宗教的基礎である。デモクラシーは、法制度的には、「日本国憲法」の中によく表明されている。聖学院は日本国憲法が表明する理想へと目を上げる。

次に、〈ひとに先んじて〉ということ。李　明博氏は日本に先んじて「過去のことを詰問しない」と言った。それは「先んずれば制す」と言った自己のみへ利益を誘導しようとする術策とは思えない。国内の不興が生ずるであろうことも承知の上で、あえて日本へ差し伸べた和解と協調の手なのではないだろうか。「わたしは……反抗する民に、終日わたしの手をさし伸べていた」（ローマ書十章二十一節）と言われる神の〈先行的恵み〉を、この李氏の態度は反響してはいないだろうか。

＊

私たちのなす思索も執筆も、こんなふうに超越者との関わりを反響するものでありたいと思う。

聖学院キリスト教センター所長　小倉　義明